

## 「歌劇《フィガロの結婚》 オペラ・ブッファ」

★★★★★

2008（平成20）年12月29日鑑賞  
梅田ブルク7>

台本：ロレンツォ・ダ・ポンテ

指揮：アントニオ・パッパーノ

ロイヤル・オペラ合唱団

ロイヤル・オペラ・ハウス管弦楽団

フィガロ（伯爵の従者）／アーウィン・シュロット（バリトン）

スザンナ（伯爵夫人の侍女）／ミア・パーション（ソプラノ）

バルトロ（伯爵家お抱えの医師）／ジョナサン・ヴェイラ（バス、バリトン）

マルチェリーナ（伯爵家の女中頭）／グラシエラ・アラヤ（メゾソプラノ）

ケルビーノ（伯爵の小姓）／リナート・シャム（メゾソプラノ）

アルマヴィーヴァ伯爵（領主）／ジェラルド・フィンリー（バス、バリトン）

ドン・バジリーオ（伯爵家の音楽教師）／フィリップ・ラングリッジ（テノール）

ロジーナ（伯爵夫人）／ドロテーア・レシュマン（ソプラノ）

アントニオ（庭師、スザンナの叔父）／ジェレミー・ホホワイト（バス）

ドン・クルツィオ（裁判官）／フランシス・エガートン（テノール）

バルバリーナ（アントニオの娘）／アナ・ジェイムズ（ソプラノ）

2006年上演・Livespire（オペラ）・185分

配給／ソニー

### <実は、はじめて・・・>

ミュージカルファンの夢が1カ月ほどブロードウェイに滞在してミュージカル三昧で過ごすことなら、クラシックファンの憧れはドイツ連邦バイエルン州北部フランケン地方にある小都市パイロイトで毎年7月から8月にかけてワーグナーの歌劇・楽劇を演目とするパイロイト音楽祭に参加して、1カ月ほどオペラ三昧の生活を送ること。しかし、弁護士として日々の仕事に追われている私には、そんな時間的余裕はない。また、時々やって来る本場のスタッフによるオペラを鑑賞するのは、数カ月前から予定を決め、ほぼ1日潰すことを覚悟しなければならないから大変。そんな事情のため、よく考えてみれば劇団四季のミュージカルはよく鑑賞しているが、本場のオペラを鑑賞したのは『カルメン』だけ。

モーツァルトの『フィガロの結婚』は年末年始のテレビ番組や映画『アマデウス』（84年）で観た断片的な知識で知っているだけ。もっとも、アルマヴィーヴァ伯爵（ジェラルド・フィンリー）の小姓であるケルビーノ（リナート・シャム）が歌う『恋とはどんなものかしら』は、東京への新幹線での往復中、グリーン席に備えつけられているオーディオで何度も聴いたし、08年6月からは日曜の午前中放映のテレビ番組『報道2001』で、ソプラノ歌手林美智子がオフィス設計の商業ソングとして歌詞を変えて熱唱中・・・。

### <格差社会を嘆く前に・・・>

アメリカ発の金融危機に端を発した経済不況の広がりによって、トヨタが赤字転落の危機に陥った。そのうえ、非正規雇用労働者のみならず、正規雇用労働者のクビ切りまでが社会的大問題となり、格差社会への恨み節が今や日本国中に広がっている。このままでは、貧乏人は教育を受けることもできず、まともな職に就くこともできず永久に貧乏人のまま・・・？そんな議論がまかり通っているが、私に言わせれば、そんな点ばかり強調する論法はナンセンス。

その根拠はここでは述べないが、『フィガロの結婚』の格差社会、というより、これこそ絶対変えることのできない貴族と平民の格差（差別）、男と女の格差（差別）を見ていると、今の日本社会がいかに自由に恵まれた民主主義社会であるか実感できるはず。

### <『フィガロの結婚』の登場人物を階層分析してみれば？>

『フィガロの結婚』の登場人物の中で最下層に属するのは庭師のアントニオ（ジェレミー・ホホワイト）のようだから、その娘のバルバリーナ（アナ・ジェイムズ）や、その姪のスザンナ（ミア・パーション）は召使いとしてアルマヴィーヴァ伯爵に使われるくらいしか職業選択の自由はないはず。他方、スザンナとの結婚が決まっているフィガロ（アーウィン・シュロット）は、ロッシニがオペラ化した『セビリアの理髪師』でアルマヴィーヴァ伯爵とロジーナ伯爵夫人（ドロテーア・レシュマン）との仲を取りもった功績が認められて伯爵の家来となっているのだから、召使いよりは少し階層は上・・・？またロジーナ伯爵夫人の不倫相手らしいケルビーノという若い小柄な青年の「小姓」という身分はよくわかかわからないが、浮気が発覚してもお手打ちとはならず、せいぜい連隊の空きポストへ飛ばされるくらいだから、かなり恵まれた立場・・・？さらに、医者であり後に実はフィガロの父親だったことが判明するバルトロ（ジョナサン・ヴェイラ）や、音楽教師としていつも伯爵のちょうちん持ちをしている男ドン・バジリーオ（フィリップ・ラングリッジ）らの地位は、きっとフィガロより上。また、いつもバルトロとつるんでいる年増女のマルチェリーナ（グラシエラ・アラヤ）（実は彼女がフィガロの産みの母であり、フィナーレではバルトロと結婚）は女中頭だが、その身分保証はどの程度？現在の日本の格差の拡大やその固定化を嘆く前に、こんな視点から『フィガロの結婚』の登場人物たちの格差を考えてみれば面白いのでは・・・？

### <「初夜権」とは、何と恐ろしい・・・>

『フィガロの結婚』は、モーツァルトが30歳の時にウィーンで1786年5月1日に初演されたが、このオペラに含まれている貴族批判の視点は少し危険視されたい。1786年と言えば1789年のフランス革命の直前だから、中世の間ずっと続いてきた王制と貴族制は既に風前の灯となっていたわけだが、当の本人たちがそんな時代状況に気づくはずがないのは当然。そこで面白いのが、『フィガロの結婚』全編を通じるテーマである「初夜権」の有無とその廃止をめぐる論争。

『序曲』が終わった後フィガロが歌い出すのは、〇〇cm、〇〇cmという曲だが、これはアルマヴィーヴァ伯爵がくれるというベッドがスザンナと一緒に住むことになる部屋の中に入るのかどうかを確認しているもの。しかし、伯爵が自分の部屋に近い部屋をフィガロとスザンナに与えた理由が、フィガロを使いに出した後この部屋に押し付けてくるのに便利だから、だったとしたら・・・。スザンナからそんな指摘を受けたフィガロはビックリ。そして、伯爵夫人との結婚を契機として廃止された「初夜権」を伯爵が復活させるべく画策していると知ってさらにビックリ。さあ、そんなところから始まるスケベで浮気な伯爵と夫の浮気は責めるくせに自分は小姓のケルビーノと浮気している（？）伯爵夫人たちに振り回される主人公フィガロとスザンナは、無事結婚式までたどり着くことができるのだろうか？

### <ストーリーも面白いが、アリアとアンサンブルの調和の見事さをじっくりと>

モーツァルトのオペラの中で1番人気は、多分『フィガロの結婚』。それは何よりも浮気、不倫という人間の本性に則したテーマを面白おかしく、かつ教訓的に練りあげた面白いストーリー性のため。他方、オペラでもミュージカルでも、ソロで歌いあげる歌手の歌唱力を観客に見せつけるアリアと、数名あるいは十数名で歌うアンサンブルのバランスが大切。

『CATS』では『メモリー』などのソロの曲が有名だが、『フィガロの結婚』のそれは、フィガロが歌う『もう飛ぶまいぞこの蝶々』やケルビーノが歌う『恋とはどんなものかしら』。『アマデウス』にはモーツァルトが頭の中に描かれている『フィガロの結婚』の構想を熟っぽく語るシーンがあったが、そこでは二重唱から三重唱へ、そして四重唱から五重唱へつながっていく美しいアンサンブルの構想が語られていた。

『フィガロの結婚』で有名な六重唱が歌われるのは、第3幕の第5場。つまり、フィガロの右腕にあるアザを見せることによって、フィガロがマルチェリーナとバルトロの息子であることが判明した時に歌われる『お母さんをよく見ておくれ』という六重唱の曲。これを歌うのはマルチェリーナ、フィガロ、バルトロ、ドン・クルツィオ、伯爵、スザンナの6人。これはほんの一例だが、『フィガロの結婚』ではそんなアリアとアンサンブルの調和の見事さをじっくりと。

### <原作を知り、その全後編を知ればさらに面白い>

私が勉強して今回はじめて知ったのは、モーツァルトの『フィガロの結婚』の原作はフランスの劇作家カロン・ド・ポーマルシェが書いた第1部『セビリアの理髪師』、第2部『フィガロの結婚』、第3部『罪の母』の第2部に当たるものだという。『フィガロの結婚』のフィナーレは、スザンナへの浮気心をさまざま形でこらしめられた伯爵が、とうとう伯爵夫人に対して心から謝罪し、伯爵夫人もこれを許すことによって大団円となるものだが、実は第3部では・・・？

第1部『セビリアの理髪師』でアルマヴィーヴァ伯爵と伯爵夫人ロジーナとの結婚をフィガロが取り持ったという前提知識があると、第2部『フィガロの結婚』での伯爵とフィガロの微妙な人間関係がわかりやすい。また、第2部『フィガロの結婚』は前述のような大団円となるのだが、ホントの人間関係はそんなにキレイなものではないもの。したがって第3部における伯爵が養女にしているフローレスティーンと伯爵の一人息子レオンが愛し合っていることに異議を唱える陰謀家ベジャースの企みとは？そんな第3部『罪の母』はモーツァルトの死後1792年に初演されたとのことだが、そんな第3部でのベジャースの陰湿な企みを察知し、伯爵のために奮闘するのがフィガロとスザンナ。そこまで勉強すれば、たちまちあなたはフィガロ博士・・・。